

研究報告

前野喜代治 著

書評

『佐久間象山再考』

—その人と思想と—

小林 健 三

本書は本学教育学科前野教授のライフ・ワークであるとともに、喜寿記念出版で、昭和五二年二月長野市銀河書房から世に送られた。われわれは多年近世教育史の研究に造詣の深い著者が、その蘊蓄を傾けた本書をめでたく刊行されたことを心から慶祝申し上げる。

著者はこの十年間、主に幕末思想家を対象に「つぎに労作を『人文学会紀要』に発表された。第二号に「^{吉田}松陰留魂録の研究」第六号に「横井小楠の学問と思想」がそれぞれあり、教育学をふまえた独自の新研究は定評のあるところ、そしてこの度は幕末偉才の頂点に立つ学人佐久間象山像の内奥にせまる研究の発表で、「王侯将相寧んぞ種あらん乎」の明文から始まって、海舟の「春に先立つ花、時に先立つ説」を引用して象山の地位を、「残霜に傷われ、旧弊の厄するところとなりながら、燦として象山の歴史的地位（意義）を確立するもの」と考える」という文字で結んでいるあたり、象山研究の大家としての面目を躍如たらしめている。けだし著者として会心の作であり、執念とも見られる本書第三篇『砲封論』の再検討（本書後半一〇）——ここに著者のいう「見直し」の深意がひそんでいるのではあるまいか——は、前人未発の新研究であり、『省營録』

の君子五案説の第五にいう「東洋道德、西洋芸術、精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもって民物を沢し、国恩に報ゆる」の感慨を再現したものともてよいと思う。象山が大砲を鑄造した嘉永元年（一八四八）はフランス二月革命と、それから有名な共産党宣言の発せられた年にあたる。これから世界情勢は変換の時期に入り、米ソ超大国の二大陣営対立の二十世紀につづくこととなった。それはともかく、一八四〇年代の老中水野忠邦の天保の改革らしい日本の情勢は構造的変化の兆を明らかにし、海防と開国の両論が西欧諸国の外圧に抵抗して封建社会の現状では抗し切れぬ時代に入ってきた。超封建すなわち明らかに近代に足をふみ入れたと申してよい。朱子学徒である象山が西洋の科学技術の長を認め、開国論を提唱したことのなかに、「時に先立つ」見識がうかがわれる。筆者が『砲封論』を主軸とする本書を、あえて著者のライフ・ワークと推奨する所以もここにあるのである。

二

つぎに本書の構成と特質について述べる。

本書は三篇の論考から成立している。第一篇は象山の生涯を九節に分けてその成長の跡を追って学人象山の人間形成を述べたもので、本書のサブ・タイトルにある「その人」の解明であり、第二篇省營録研究への導入の役割をなしている。

第一節から四節までは家系・血統と、生誕・幼年・少年期・青年期の叙述で、豊富な史料を駆使して「佐久間の神童」振りが見事に描かれ、その頭録の一端がよくうかがわれる。幼名を啓之助という。詩経の「東に啓明あり」に出で、父一学の期待のほどがわかる。「啓之助 知能は頗る聰明利発、特に記憶力は抜群で、文字通り一を聞いて十を悟る麒麟児であった。三歳の秋、付近の禪刹大林寺門前の立石に刻まれた禁葷酒という文字を、乳母の背中からのぞき覚え、

父の面前で「禁」の字を書き示し、一学を感嘆させた。父一学は易学に熱心で、毎夜二、三度易書を音読して就寝するを習わしとした。啓之助は、母の膝に抱かれながらこれを耳にし、二・三歳の頃すでに周易六十四卦を悉く記憶した。

このことは彼の著『砲卦』の冒頭に自ら記述している。……家庭の人々、その他周囲の者から、心を尽した養育により、頑健な身体となった啓之助は、その腕白振りは目に余るものがあつた。強悍な気鋒は鋭く現われ、山野を跋涉し高樹によじ登り、千曲川の深淵を泳ぎ廻る等々は日常茶飯事として、近隣の幼少年との喧嘩口論を好み、衣服を汚し或は裂き、生血を流さぬ日とはなかった。この面から言うと、少年啓之助は実に手に負えぬ悪童であつた。「佐久間の門から石が降る、石投げ小僧の啓之助、やあいやあい」という童謡は、その一斑を示すものである(二七ページ)。

多少誇張はあるにせよ、性粗暴、強情、狷介、毫も調和性がなかったことがわかるが、いわゆる三つ子の魂は、終生渝ることなくその粹をひろげていった。文政八年二月(十五歳)元服、嫡子の届出許可。四月「松代の明君」とうたわれた藩主幸貫に拝謁。松平定信の二男である。後年抜かれてしばしば中央の要職についた名君である。松代襲封の翌年一学の才幹を見ぬいて側右筆に拔擢したが、また特に少年啓之助の器量を愛し、その大成を期待し、以後生涯にわたる最高の庇護者となった。蘭学の原書をつぎつぎに象山が購入して読むことができたのは、このためである。ショメールの百科辞典は藩費四十兩を要したが、象山はこれによりガラスの製法を知り、それを実用化した。チケールの兵書、カルテンの砲術書の原書またしかりである。こうした君臣水魚の交わりがで、象山が自由に研究を進める余裕をもつことができたことは、一面封建社会にみられる特色であつたといわねばなるまい。

ここで第一節象山の家系・血統の項をふり返ろう。著者独自の教育学的考察が見えるからである。

佐久間の家系については象山考証の『略譜』があるが、曾祖父からの血統は次の通りである。曾祖父佐久間国品は岩間二郎左衛門の二男、母方の苗字佐久間氏を称し、松代藩主真田信弘に仕え知行百石を食む。この国品に男子なくその女に婿養子を迎えるがその嗣子は夭折する。藩は国品多年の勞を憫み、同人の甥村上彦九郎の男、国正を養嗣子に迎えて家名を再興させ五人扶持を給した。しかるに国正にも男子なく、同藩士長谷川千助の次男一学国善を迎えて嗣子とした。国善の子は象山である。これで見ると佐久間家の家系が一系の血の継承でなく各方面の血の合流となる。その合流点に象山という「奇傑」が生れたとする。この原理を著者は次の如く述べる。

「元来、古くからの流れが、すでに老朽化し、汚濁している場合には、俊傑の士の出現は期待し難いものである。流れを異にする優れた清新な血の凝集するところ、そこにこそ俊敏な英才―温順で円満な人柄でないかも知れないが―が出生することも考えられる。このように見てくると俊秀卓抜、しかし狷介・不羈と称せられた象山こそ「王侯將相寧んぞ種あらん乎」の典型とも見られるのではあるまいか。

さて人間の成長発達の原因の一として遺伝即ち生得的素質があることは否定できない。その他に環境と教育がその重大な要素である。当人を圍繞する自然的風土的環境からの影響も認められるし、社会的文化的環境からの影響が人間の成長発達に大きく関連があり、わけでも意識的計画的な教育が最大の影響を与えることは何人も確認するところである。要するに遺伝と環境と教育の相乗積によつて、人間は成長し発達するのである(二二五)。

従来の象山研究には、ここまで深く掘り下げた説は見当らない。さればこそ象山の青年期までに受けた教育と学習法とが問題視されるわけである。

象山は幼時から家庭で父から読書・習字・易などを学び、十四歳頃藩儒竹内錫命の門に入り作詩・易学を学んだが、十六歳の時国老鎌原桐山に入門、経学

を修めた。桐山は佐藤一斎の門下、松代藩第一級の学者であった。ついで藩士町田源左衛門に会田流の和算、また宮本市兵衛からも和算の蘊奥を極めた。これが後の数学（詳証術）を以て万学の基本と断じ、西洋の科学の發達の原理を数学に求める象山学の根底となる。

十八歳、家督をつぎ武術師範の免許をうけた。家学ト伝流剣道の道をついだわけで、武士道学にも通暁していたことがわかる。文武両道を備えたその風格を想像できる。

このころ上田城外岩門村に一の毘沙門堂があり名高い活文禪師が庵を結んで隠居し兼て堂主となっていた。その庵を多聞庵という。名をきいて教えを乞いにくるものきわめて多く、禪師は乞われるままに禪・經書・詩文・書道・華音などを教授した。その数千人以上に及んだという。その門弟で傑出したのが象山であり、高井鴻山である。

明治十四年岡千仞上田に來遊したとき活文や象山の話をきいて感激おく能わず、毘沙門堂を訪い「先賢問道処」の五字の額面をかい、この堂に残して去った。この堂もその後次第に荒れはて大正十一年取り壊わされてしまった。その後この由緒ある堂の保存運動が起こり、大正十五年新たに一堂を建立し旧毘沙門堂の本尊を奉安して毘沙門堂の名残りとしたが、昭和三年上田市常田区その他の有志が協力して堂址に碑を建て、史蹟指定として後代に伝えることにした。碑は二基建てられ、その一基は東京高師教授中村久四郎博士の撰文、小松謙次郎氏の篆額、他の一基は水戸藩侍講菊地貫の撰文、篆額は佐久間象山である。

毘沙門堂で活文に学んだ故老の言によれば、象山が見えたと禪師は他の弟子たちをさきに帰らせて、唯独り象山を相手に教えてやり他の者のその側に近づくことを許さなかったという。禪師が象山の教うべきを知って丁重に取扱ひ、その知る所を傾けて象山に授けたことがわかる。一日天候が俄かに變つて雨降りととなった。禪師は象山に一泊をすすめた。象山はその厚志を謝したが、帰宅

を母に約束したからと辞退した。禪師これをきいて、然らば帰るがよいといって止めだてもせず、雨を衝いて帰途に上る象山を見送ったという。親孝行の象山を暖かくつつんだ師と弟子との魂の交流がうかがわれる美談である。象山はその知遇に感じ、また深く禪師を心服していたから、忝しく師弟の礼をとって永く渝らなかつた。禪師の教授法が右の中村久四郎博士の撰文中に見える。

禪師ノ人ニ教フルヤ其ノ年齢学力志望ニヨリテ諸班ヲ作り師ヲ環シテ坐セシメ、師ハ中央に在リテ輪講シ教授法ノ妙ヲ極ム。

「能力別」複式学級の教授法であつて、大正期の新教育運動の中にも類例を見ない漸新な教授法である。（『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十一輯昭和五年一月上田市毘沙門堂址並活文之碑による）

第五節から第九節までは、二十二歳江戸遊学の希望が容れられ藩はその学資まで供して、その若い学徒の大成を期待したところから始まり、二十八歳越後遊歴中、長岡藩の新潟奉行小林誠斎との出会い、その子虎三郎の指南役となつた経緯、天保十年再度の上江、神田阿玉池畔の開塾（玉池書院・後の五柳精舍）江川塾入門、蘭学研究、嘉永四年四十二歳木挽町で開塾、砲術及び經書の講義、この時象門二虎といわれる小林虎三郎・吉田松陰の入門があり、『砲学図論』『砲卦』の二著ができる。ついで松陰の米艦渡海失敗事件に連座し江戸伝馬町の獄に、ついで在所表に塾居を命ぜられ、その間に代表的著作『省營録』の草稿ができる。

以上が学人象山の遍歴と人間形成であり、ここから第二篇省營録を正眼に構えた『省營録を見直す』の研究に入る。（一）人格（二）修養（三）学問（四）経世（五）海防の五節に大別してそれぞれ透徹した考察を進めてゆく。象山の思想と行動を内面から支えたものは、朱子学的教養と強烈な天龍觀・使命觀であつたと規定される。象山の旺盛な行動力、敢為な実行性の点から、象山を陽明学派に所属さ

三

せる見方もあるが、彼は歴とした朱子学徒であり、彼を育てた学的环境が朱子学、上江後の修学もそれ、天保八年大塩中斎の乱を、陽明学の弊害の実証とし、朱子学を以て天下人心を肅正せよと極論していることでも明瞭である、と。これが定論であるが、世間には往々彼を陽明学派と見なす説が未だに行なわれている。この先蹤をなしたのが明治三十年十月刊行された井上哲次郎博士の『日本陽明学派の哲学』(A56)であろう。本書第五章佐久間象山の条に「嘗て佐藤一斎に学び陽明の学を奉ずるものに似たり。門人吉田松陰、小林寒翠、加藤弘之等あり」と述べ、付録(一)陽明学派系統の佐藤一斎の門下にいられている。井上博士はそれから五年たつて『日本朱子学派の哲学』(A56)を(同三十八年十二月)刊行されたが、大正十二年九月十三版発行の砌り付録六編を追加、第六に「佐久間象山の人格と学説」と題する一章を設け追加増補している。大正二年版『象山全集』を読まれた結果「彼を以て単に陽明学者とするだけでは十分でない」と訂正されたのである。しかしこれが先驅となつて昭和八年刊行の東大史料編纂所の『読史備準』儒学系陽明学派に佐藤一斎—佐久間象山—吉田松陰と記載されてからこれが定着するようになった。例えば昭和十一年刊行朋友出版の『最新歴史年表』が「学統図」を収録「儒学学統」の面で象山を陽明学派に入れているがごときである。象山が一斎門下の俊足であることに間違いはないが、それゆゑ陽明学派の人と断ずるのは早計であり正確とは言えぬ。その一は朱子の先輩邵康節の学を貴び、天地万物の理を窮めるには、この学より入るべしとなし、『邵康節先生文集』を編集し自ら序をかいている事実

に注目すべきであろう。邵子の学は易に基づき、朱子の易学は邵子の説を伝えるもので、当時学界では邵子を説く者がなかつたが、独り彼は邵子を尊重した次に藩主の命によって四書の訓点をつけた。『四書経註旁釈』がそれで、今わずかに「大学」の部のみが残っているが、これを見てもその学風を察するに難くない。

第三篇は「砲卦を検討する」と題し七二ページにわたる前人未発の新研究で、象山四二歳(嘉永五年十月)易象を以て大砲の原理を解明した『砲卦』全篇の叙述にあてている。本書は象山在世中は版行されず、砲学塾の門下生にその成業の場合、象山自ら白絹に全文を自書し授与したものである。それがいつの頃か版木に付され松代代長谷川家に所蔵されたのを昭和九年象山全集出版の砌り登載することになり、全集第一巻に始めて収録されることになった。著者は第三編第一部で第一その成立論、第二総論、第三各論、第四余論、第五むすび、第二部でその現代語訳を掲げ、さらに補説として「易の基礎的知識」について初学者に判るような用意周到な解説を付している。

象山は、易の六十四卦の中の火沢睽の象を玩味して、そこに砲の象があるものとみた。そこでこの睽の卦を砲卦と呼び、易の本文に擬して、砲を掌る者の道を説いたというのが砲卦全篇の主意である。手法は朱子の周易本義をうけているが、易理から大砲の機能を發揮した空前の書であつたから、米国へ持参して邦人あるいは清国学士に示すことができれば、聊か本邦のため氣をはく一助ともなろう、と象山自ら自賛している名著でもある。「シナ哲学に科学を融合した東洋最初の名著として永く記念されねばならぬもの」(飯島忠夫博士)と言われている問題作である。しかし著者も「あとがき」(天人合一の思想とカントの世界観)で明白に指摘されているように、「シナ哲学に科学を融合」との言は、もっと慎重に考慮されねばなるまい。易理と西洋科学の方法とは違つからである。

最後は「あとがき」で、一象山の評価 二易理の中軸(イ)易と象山(ロ)对待と矛盾(ハ)変易と発達(ニ)天人合一とカント的世界観(ホ)象山の限界 三儒学的教養(イ)象山と朱子学(ロ)その行動と朱子学(ハ)象山の歴史的地位の順に、著者多年の蘊蓄を

傾けた「佐久間象山論」の「総括」ともうけとられ、著者の深い学殖のうかがえる一篇であり、象山研究の決定版と申して差し支えない。以上が本書内容の概略である。われわれはこの一大労作に対し心からの敬意を表するとともに、著者の今後のご長養を祈ってやまない。

なお、昭和三十九年六月佐久間象山百年忌を記念して京都象山会から『佐久間象山先生』と題し哀悼記念録が刊行されたことを付記しておく。会長新村出博士の序文があり、皇大教授久保田収博士の執筆、B6判一四〇ページである。

(前玉川大学教授)

『佐久間象山再考』―その人と思と―

(B6判・二〇三ページ・定価一〇〇〇円・長野市稲葉上千田一四三―一
銀河書房刊)